

臺の狭い玄關があつて、左が臺所、右に二階建の座敷が一棟ついで居ました。月明りに裏の小高い崖は白く、光つて見えました。

船は、風の故て二時間も遅れて着いたさうです。此港には日本人が二百人程おまして、守備隊はなく、憲兵分隊が一ツあるツきりだと聽きました。

湯から出て、食事を済せて、九ツ切を二枚水張して、休みました。風の雨戸にブツ、かつて、外れて飛びさうなので、氣に掛つて、をち／＼と眠れませんでした。

時計は一時を告げました。

## 青森と洋畫

森ひせつ生

我が青森地方の人々も、近來洋畫の價値をやゝ解し得て、油繪の、水彩畫のと、口にするような程迄になつて來た。

此れは僕等の大いに、欣喜に堪へない處である。然し、翻つて、十年の前を考へて見るに、洋畫は極めて幼稚な域にあつて、油繪と水彩畫の區別は勿論日本畫と、洋畫の區別をすら、解し得なかつた人々が多かつたのである。

洋畫と云ふと、すぐ反物に付いてる石版刷のペーパーやいろいろな、罐詰等の表を、包んである、繪紙や、墨で、あやふやな影を付けた、名所圖等を聯想したものゝ、やうに覺えて居る。それが彼の、日露戰爭前後よりして、雜誌に、又は繪ハカキに、

洋畫が多く見えて來たので、洋畫が從來の日本畫に比べて、人物なり景色なりに於て、實際に見える、と云ふ點に興味を持つようになつたものらしく、急に其れ以來、一般の人々の頭が、洋畫に對して長足の進歩を示して來たのである。

今では大凡、中流以上の家庭の奥座敷や、又は客間に、店頭にも、水彩畫の肉筆の一枚や、油繪の印刷畫の一枚位は、見受けない家は少いやうな程迄になつて居るのである。

斯様に進歩を示して居るものゝ未だ全く、一般の人々に普及されてあるとは云ひ難く、前に云ふたような、際々に出來る彼の、際物繪や金泊入りの所謂、金ヒカの江戸名所圖等の、數の劣等なのを見て、洋畫は貫目が無くて上品でなく、下品で俗臭いものである「等」と、誤解して居る人も又、少くないのである。

彼の市中の商家の、家根の上にある、畫工が、ほとんど畫と云ふものを無視して、なぐりがきする看板を見て、油繪の上々なものだと思ふてる人も、あるのである。

其れに青森地方の、風流な、物持ちの多くは、古い人々であるからして「洋畫等は、西洋人が、かくもので西洋人の好むべきもので、我々日本人は、どこ迄も日本人のかいた日本畫を愛すべきものだ」等と云ふたような口調で、途方もない處で、國家的觀念の、外に狭い意地を立て、古い黄色くなつた掛軸に力こぶを入れ「やれ雪舟」の「やれ探幽」の「やれ應舉」のと騒ぎ廻つて……時たま、偽物を買ひ込むような向きが多いのであるから誠に、殘念な次第である。洋畫の長所を眞に、一認めらるゝ時は

未だくであるのである。

兎も角、現在では未だく比ぶ可くもない日本畫の隆盛時代と云ひ得るのである。

然し今の新しい、考へを持つてゐる、若い人々の多くは、たしかに日本畫よりも、洋畫に興味を解して居るのが多いのだから此の若い人々の時代となる、十数年の後には、必ず洋畫の時代とは、なることだろうと信じて、僕等、洋畫の研究者は、心竊に安んじて勉勵して居るのである。

要するに洋畫の概して日益、盛んになり行きつゝあるのは事實であるので、僕等も勵みがいのある事だと喜んで居るような譯である。専門家たらん爲にてあるうが、單に娛樂の爲であらうが、兎も角僕等と趣味を同じふしてパレットを握つて研究しつゝある人も、又少なくないのであつて、夫れ等の人々は是ぞと思ふ先生の、ないものだから皆、講義録や、諸大家の著された、手引本の類と、美しい自然によつて研究しつゝあるのである。

それで、これから、洋畫を學んで見ようと思ふ人に、淺果かではあるが、僕の少しばかり經驗から得た、事を申して見るに。

一體、洋畫の繪具や、道具や、何かにつけて至極、不便な地方の、研究者は實際一割、損な位置にあるのであつて、我が青森地方の研究者も、其の御多分に洩れず、不便を感じる事があり勝て、別けて油繪の研究者は此れが甚しいので困つて居る。木炭の果てから、カンブラスに至る迄、皆一寸に買へないのであ

つて、繪具の一色、油の一と瓶も無くすれば、皆東京迄注文してやらなければならぬので……それがどうしても、早く十日位は要するのだから、誠に困る……其れで勢ひ油繪の研究も、皆怠り勝になりやすいのである。其の點に行くと、水彩畫の研究は餘程樂であつて、筆紙から、色まで何一つ、土地で買へないものはないのであるから、僕等も自然、油繪よりも水彩畫に親しみ勝になるのである。

夫れ故に、やはり是から研究しやうと思ふ人は、水彩畫の研究が良いと思ふのである。

前に言ふたような不便もあるし、それに油繪の技術が、水彩畫のそれに比らべると始めは、容易で無い點が多くあるのであるから僕は、どうしても水彩の研究を御勧めするのである。

それから御勧めついでに、御勧めしたいのは、作品の批評を乞ふ可く適當な、良師の無い青森地方の研究者は、よろしく春鳥會の會友となられん事を望むのである、其の故は、各自の作品の批評がして戴けるからなのである、其の批評をして下さる先生は、水彩畫會の有名な、先生方であるのだから、たとへ通信教授であつても、此れがどんなに有益であるか、わからないのである。

斯様にして、其の指示された、長所短所に留意して行くようにしたならば、地方にあるからとて、差して不自由を感じずに進歩して行く事は、あまりに難くは、なからうと思ふのである。

其れから、青森の繪畫の團隊としては、一昨年秋僕等の相謀つ

て起した「北洋畫會」と云ふ十數名の會員から成つて居る、會があるが目下の處、有名無實の觀なきにしもあらずではあるが、三回迄も展覽會を公開して盛況を極めた程のものであるから、又今に時機さへあれば再び盛返して行きたい積りであるから、これから研究しやうとなさる人は、此の團體の一人となられて御互に研究して行くように、してもらいたいのである、會員の中には山岳を跋涉して偉大な幽靜な自然を探りつゝ熱心な研究を積んで居る、今白鷗君や、つらい御役所勤めの餘暇にスケッチ箱を持ち出して、市中や近村を走せ廻つて居る、藤野草明君や、此の外在京中で原町の研究所に通ふて居る、研究に忠實な三浦君や、岡田三郎助先生の膝下に其の教へを受けて居る松岡君や、大澤君、美術學校在學中の柿崎清助氏(會員ではないが)等は皆、洋畫に一生を捧げて、未來の大家を夢見て力んで居る人ばかりなのである、兎に角、こんな小さい青森の市から、こんなに多くの洋畫家志望の者を出したのは、大に慶すべき事であらうと思ふのである。

備前の岡山からは、一流の大家が三人(松岡、満谷、鹿子木)も出て、其外洋畫家が澤山出て居るので、斯道の人に知られて居る處であるが、今に我が青森も、注目され可き地だらふと、今から僕は期待して居るのである、然し此れも要するに僕等の勉勵の如何によるのであるからして、其の積りで奮勵しなければならぬのである。

又女にも、此れに筆を染めて居るのを、しばし見受けるので

あつて、先頃東京に行かれた女流洋畫家落合らん子女史は、あまり郊外の寫生はせなかつたが、油繪と、擦筆畫に妙技を示して、青森には先生の一人として知られた人だ。僕も其の教へを受けたものである。

女史と、女史の教へを蒙つた渡邊まさ子嬢との二人が、青森で始めての野外寫生をした人であつて、中にも年若な嬢の勇氣と、熱心には少なからず喜ばしく思はれたのである。

斯様に、娛樂の爲とは言へ、女に迄もこんな、熱心に研究するものゝ出て來た程、兎も角洋畫の盛んになつたのは、他に理由の無いではないが、與つて最も力あるのは、恩師大和田篤治先生であると云ふ事は、何人も此れを拒まぬだろうと思ふのである、先生は一昨年の春、故郷の四國に轉任なされたが、青森には中學校の圖畫の教授として、數年間居られて大に僕等、後輩を導いて呉れた人で、我が黨で先生の教へを受けないものはないのである、のみならず青森地方全般にも、いくら洋畫の趣味を普及したか俄に推測しがたいのである、そして先生は有名な中村不折、鹿子木、満谷、石川寅次各先生等と同年頃、不動舎に小山先生の教へを受けた人である。

先生の、最も妙を得たものは油繪の、靜物であつたように覺えて居るのである。

僕等は、青森の洋畫の發展して行くに連れて益々、先生を忘却する事が出来なと思ふのである、未だ筆を止めたくはないが、貴重な本欄を、此んなくならない事で、永たらしく無駄にするの

も失禮の至りであれば、一と先づ、れて筆を止めて置く。  
終りに、青森地方の研究者の、大々の奮闘を望んで止まないの  
である。

## 寢前小話

健堂生

大下先生の『水彩寫生旅行』が出版された、僕想ふに此の冊子  
こそ出刊界にレードを破つた物であると。

二十有餘の紀行文と數十の繪は實際見て居て暑熱の夏をも忘れ  
しむ文も繪も雜誌『みづゑ』で見たものも多いが、然し何回見て  
もあきぬ書籍である。

僕は此の本を友として初秋旅立つ考へてある、秋が來た、秋  
だ。秋と旅は密接なるものであると思ふ、僕は四季中秋が一番  
好きだ、木が紅葉するからでも氣が晴々するからでもない。僕  
は唯秋と云となんとなく戀しい、僕の歌は先天的に秋に酔ふて  
居るかも知らない、何んとしても秋は好い。

僕は想ふに、天才は決して淫靡放逸なる精神に宿る能はざる  
也だから、我々の如き一の物好きに依つて美術を學ばんとする  
者でも、心は常に神聖に保たれたいと思ふ、精神の腐つた者は  
如何なる技術があり、如何なる好材料を持つても繪は好く出來  
ないと思ふ。二十錢の繪具でも精々たる心の者は立派な繪を作  
る、我々は唯空想にばかり走らずに一步步進まねばなるまい  
と思ふ。

僕等の様な者は、日曜以外は日々の業務に忙しいので書物を  
見る事も繪を書く事も出來ない、僕は日曜に繪を習ひ本を讀  
む様にして居る、『みづゑ』原稿は氣の向いた晩寝る前に書く様  
にして居る。

僕は自然の子として、自然にはなれたいのである。人間  
と云ふものは、自然の美、自然の慰安を欠いたなら自己の生活  
が一步一步墮落の底に行く事を諸君にも自覺して欲しい、一事  
の欲に迷はされると大切の藝術は滅亡して了ふと思ふ。

## 春鳥會正會員

遠洲濱名郡富塚村馬生

山本貞次郎

Yo Takahashi Photograph P.O. Box 14 Bintan china

山口慎吉

## 次號の豫告(八十五號、三月三日發行)

口繪として故大下氏、後藤工志氏、水野以文氏、他に一枚未定  
の分共)等四葉の原色版を挿入すべし。

挿繪は丸山晚霞氏のスケッチ(木版)。日本水彩畫會新年會餘興  
舞臺面と觀覽席を寫真版として出すべし。

記事の主なるものは石川氏の『水彩畫用紙の談』。眞野氏の『寫  
生用透視畫法』。服部嘉香氏の『ナイト氏の繪畫概論』。日本水彩  
畫新年會の記事、故大下氏遺稿、スツデオ紹介等を掲載す。